

と古人もいわれました奉公に出た日より其一身の主人の物でござるからしていかやうな無理も苦勞もかへり見ずにつとめねばならぬ事なり是を常にわすれずかりよも私心の心なく主人の御用をよくつとめて此身の主人のものあれば氣儘我儘にあらぬ者としつて平常忠信をむねとしてつとめまするとどのやうな無理も主人でも其志しに耻て無理も直らにやありませぬこなたにかざらず其家久しくつとめばかま羽織をきて主人のかわりよもあるやうにありますと直は慢心を起し此内でのかれがあらねば用がたりぬ身上が立ゆかね杯と思ふからして主人のいひ付も用ひず氣儘に万事取計るふ故に終に主人の見はあされ其家を追出され年來の舊功も水のあわとあり甚ださんざした人をあまた見ました功はこる時の其功をうしなひ大きに福徳を落すことあり其家來があくても其家の随分と立派に立まする見かざられた家來の身の立がたしかやうな事をえらすして此内でおれが居らねば用がたりぬ身上が立ゆかねと思ふの大ひあるうらたへ者あり是といふも人の人たる道をえらぬ故でござるこなたの主人のいとまを出す心もなく何卒身をよくおさめて未々の家持にもあるやうにと思ひ氣にいらぬ事もいひますすれバ主人の眞實でござれどもこなたの大不實でつとめよくい故にいとまをとるふといわしやるの大ひあるあやまりあり其あやまりを改めて眞實につとめさつしやれ親への孝行主人への忠義其身

の仕合此上にあるべからず狂歌をよみますくふうさつしやれ○捨て行主より先へおのが身のすたるをしらぬ人のばか者と此道理は相違なし一切の家來たる者の主人の是非善悪をかへりみず只ひたすら忠義をつくして其余のわすれたるが如くよすべし左すれば福徳の十分も甘分も来るべし其しやうこあり次下にてよくしるべし所詮主人の無理非道を見て彼是といふやつに不忠不義者あり主人が無理いふからして忠義につくせぬといふなら世界中の主人の大方無理いふ人あり然らば何所へ行ても忠義をつくすべき所なし忠義をつくこねば出世も福徳も来る期なし一生埋没也無理いふ主人よりも主人の非をいふ家來の先へ亡ぶる者あり主人の非をいふ者の必ず不忠者あり世の中の主人の皆智者の善人あれども不忠者の眼に無理非道の人と見へる者あり主人の十分よよい人あれども悪人のわるくいふ者あり不忠不義のくせあり歌に○身の科の思ひもよらず主親をそしる人こそあわれありけりと人をわるくいふ者の己れが悪き故あり是の悪人の友を拵えて己れが罪をかくさんとする悪人あり誠の忠義を盡す人の主人の非の見ぬ者あり此人の眼に世界中の主人が智者の善人と見へるあり不忠の人といふらはら也一切の奉公人の主人の無理非道よかまはずとひたすら忠義をつくすべし人間第一の心得あり

○爰に主人の無理非道にかまはずと忠義をつくしてよい福徳を得たる人あり本郷五丁目

に伊勢屋吉兵衛といふ者あり幼名を吉松といふ十一歳の時近江の國より三人連にて來る二人の着と直ふ草鞋をぬぎ捨て早々足を洗ひ上りける吉松の草鞋をぬぎ水にてすすぎ垣にかけて其後足を洗ひ上つて目見をいたしける主人伊勢屋彦四郎のかれがはたらきを見て後に物にたるべき生れ付ありと此時より末頼母敷思ひける梅檀の二葉より香ばしきとの此事あり扱召使ひ見るも其つとめかた外の小兒より目にてちて見ある時彦四郎庭廻りまけるに吉松庭になき居たる是の彦四郎本郷臺いちばんの糶屋にて糶方の若ひ者廿人余あり朝の糶をあきさひ夕飯前後も米一臼宛搗せ夫を二斗入の半切に入させて夫より己れくが様々にあそびにありく事あり彦四郎吉松が泣を見て其方の何ゆへに泣やと尋ねしに吉松がいはいく御家の言葉へ玉ふといへども米を盗む者多しかくの如くにぬすまれ玉の身上の今に亡ぶべしと思へばかかましくいふ彦四郎聞て何ぞしやうと有やといふ吉松がいふよの皆米つきしまいて半切の中へいれおくひそかに米の中へ大の字をかきおきためし見るに朝の大の字過半あり大の字の其儘あるに至て少し是人の手をいれて盗み取りしやうとありといふ彦四郎も器量ある者なれば大ひにしかり少くの盗人ありとて何ぞ其様に哀むとあらんやいづれの家にも小盗人のある者あり併し汝に米奉行を申し付る間随分と盗まれぬやうとすべしと米奉行をいひ付たり夫より段々と成人するに

随てあきさひも廿人の者共よりもよくいたしける外の者共の一朝に百五十文宛もふけるに吉松の三百五十文宛もふける是のいかかる事かと云に朝七ツ又起て糶を一荷持出芝邊へ行って賣拂ひ此利二百文扱歸りて又神田邊へうりよゆき人並に百五十文宛儲ける主人の徳用いくばくかしかれがだし彦四郎の所の福の神あり彦四郎も吉松がつとめかたを感じける吉松十八歳の時心底をこゝろみんと思ひある時外の者どもよりおそく歸りけるに朝飯も喰せず水一荷汲來れといふ此水の御茶の木火消屋敷の下堀端にある井戸あり(此井戸の享保十一年九月朔日大水の節彦四郎はせまきにつぎうめさせられて今いふとありし)本郷五丁目より汲に來る一荷汲で歸ると次手に今一荷汲來れと申す吉松思ふやうの外の者共の皆々先へかへり朝飯をたべたべを吞で居るも其者どもに申し付ずしてわれに申し付るのいかかる人の使ひやうやと思ひければ又一荷汲來る迎もの事今一荷汲來れといふそこで吉松大ひにうらみ是の我を責こるさんとの仕方あり是非もあし今日只今迄の命ありと思ひ定め小石をひろいたもどにいられて入水せんと思ひしがいやくまてまべしほうばいのごんげんにてかやうさうきめにあわんもはかりがたし然れば水を汲てかへり其後いかやうともあるべしと思ひ直し水を汲て歸りければ彦四郎殊の外よろこび下女共にいひ付て足をあらわせば愛へきたるべしとて彦四郎が前へよびよせ衣賞を看か

へさせ袖の小補一重帯等もよきを結ばせて其方賑ひたるかへし我も其方を待て朝飯も
 たべずよ居たると鯛のやき物杯の料理にて相伴を申し付たべ終りて廿人の糶方若ひ者共
 を呼よせ彦四郎申し渡しけるは今日より吉松事吉兵衛と改名致し糶方の番頭を申し付る
 あり不足に存する者のいとまを取りて出すべし又吉兵衛儀の廿人の者共の心次第にいた
 すべし心又叶わざる者あらば我等に聞に及ばずいとまをつかわすべし万事其方が心任せ
 たるべしと申し付たり是則ち吉兵衛の主人の無理にかまわずとよく働らき堪忍づよきよ
 りかゝる幸ひを得たり扱吉兵衛の三十の歳迄糶方の番頭をつとめ後にの商ひ番頭も兼て
 つとめけるが又次の者の障りにもあるべしと思ひ宿遣入の願ひを出しければ早速よいと
 まを下され久しくつとめたりとて金三兩くれたり廿年余もつとめたるに金三兩ぐらい
 れたらば彦四郎がつらへぶつつけて取らぬ者多し是のどふも取りがたし然る
 又吉兵衛の左様を事のせぬ堪忍づよい男もありがたく存じますといふて是をてうたい
 たし夫より同町親分の天野屋長左衛門といふ年寄の方へゆき私儀も彦四郎かたを首尾能
 つとめいとまをもらい申し只今迄の大きに御世話又相ありがたく存じ奉り御禮にま
 いらひといへば長左衛門聞て先目出たし彦四郎の何ぞくれたるか問へば金三兩くれ
 申しひといへばそれのあんまり少しあせ三兩ぐらいもらつきてたぞ彦四郎がつらへぶつ

つけて取らねばよいにといへばいへく御主人の事あれば左様よのありがたし何でも思
 召次第少しもうらみどの思ひ不申しといへば夫かといつても廿年余か首尾能動めたるに
 せめて十兩か二十兩のよこして裏店でも借て出商ひでもする様に仕そふ者じやといひ
 ければ吉兵衛申様の此方にも役に立ぬ所あつて十分の修用の勤まりがたし夫故の事ある
 べし何でもかでも御主人の思召次第といふて少しも恨むる心なし長左衛門申けるは我
 等も何ぞ遣べしとて財布を取出し是のわが家にて夥しく金子の入たる財布あり是を遣わ
 しの間随分と金をもふけて末の繁昌すべしとて金壹分いれて遣はしければ吉兵衛のか
 たじけなき由申して都合三兩壹分の金子を紙にて幾重も包み彼財布に入て歸ける扱吉兵
 衛の彦四郎居室のむかふに九尺二間の明店をかりて割みたべをうつて一人ぐらしぬ其
 内にも折餅の彦四郎の機嫌をうかいひける随分とあきあひ上手なれば人より余計も
 ける扱二ヶ年もすぎで彦四郎吉兵衛を呼で申しけるやうの其方も今の通りにての相濟ま
 じ我家のあらびによき屋敷を求め見世を出すべしと思ふなり其方まいりて番頭をつとむ
 べしといふに吉兵衛並々の者あらば廿年あまりもつとめたるよ基手金もくれざるのむご
 き主人あり何とて番頭をつとむべや然るに吉兵衛申すやうのいかさま一人ぐらしにての
 甚だ不自由なればまいるべきとて借屋をまよい彦四郎の出見世へ引うつりける金五百兩

の家屋敷金千兩のあきさひ仕込み外に元手金とて五百兩都合二千兩を其方又任せし間
 よくかせぎて年々ふへるやうにすべし勘定の我も見すべし又妻もかくてあるまじとて相
 應のところより妻を迎へける扱盆暮に金子ののびたる帳面を見せければ彦四郎大ひよ
 よろこび手柄く其金子の其方の物にいたし置べしと申しける扱彼是と二年もくらすう
 ちに彦四郎大病あり吉兵衛の晝夜寝食をわすれて看病怠たらず療治手を盡すといへ共其
 印し見へがたし又信心をえて佛神にいのるといへども老病難治の症にて此度の必死を見
 へたり是によつて彦四郎も末期に及び吉兵衛其外一家親類子供等を呼集め申しけるやう
 の吉兵衛事の幼年よりつとめかた甚だよろし此方より無理をいひかけ無体事もいたし
 たれども少しも心にかげすはあいた堪忍ありがたきところをバ辛抱えてよくつとめたり
 其のはうびとして今迄預け置たる家屋敷の勿論仕込の有金等残らず吉兵衛に遣わす間皆
 々左様に相心得て吉兵衛と中よく暮し万事吉兵衛に相談えて世の中を曉梅よく渡るべし
 と遺言えて正念に命終せり扱葬式等もねんごろにいたし中陰の佛事年回等も丁寧いど
 きみける扱吉兵衛が器量の主人彦四郎よりの又々抜群の英雄あり夫より段々と身上をよ
 くいいたし大金持となり商賈を手廣くいたし手代共多く使ひけるある時よく奉公をせし手
 代上州へ絹買出しに金三百兩持せて遣しけるに道中にて女郎を買ばくち杯して三百兩の

金子を皆失ひたり夫より直に欠落して行方しれずありよける余の手代共申しける外の
 者への見せしめの爲あり急度せんぎして糺明すべしと申しけるを吉兵衛申すやうのあの
 者の是までの奉公中々よくつとめたり是によつて五百兩の遣はさんと思ふ所に三百兩を
 失ひて欠落せしし殘念千万あり兼て使はさんと思ふよりの二百兩不足ありとて行衛を尋
 ねて金貳百兩持せて使わしけるとあり外々の主人あらよさいわひにして二百兩の金子
 のやるべからず然るに吉兵衛の左様を不埒者に跡より貳百兩持せ遣わすといありがたき
 心あり殘りの手代共是を見て末頼母敷思ひ夫より後一つを不埒する者もかく皆神妙に
 家業を出精して得々に主人吉兵衛の金銀をふやし益々繁昌いたしけるに吉兵衛が家より
 出たる伊勢屋といふの五十三軒あり二百兩を捨て跡々の手代共が心を引立し誠じ町人
 の英雄一騎當千の勇者あり年久しく去て跡の絶たれ共其出店の今に方々もあり世にもあ
 りがたき人といふべし是非義非道の主人を眞實にうやまひ何やうの無理をいひ玉ふとも
 無理を仕玉ふとも夫にの少しもかまはずして己れの唯家來の道を盡したる福分あり又あ
 りがたき堪忍をよくいたしよく辛抱えてつとめたる所の福分あり是によつて主人の仁不
 仁にかまはずと唯一向に忠義をつくし主人を大事とつとめあべ天より福徳をあたへ給ふ
 事眼前ありたとひ主人に何やうの無理非道ありとも夫にの少しもかまはずしてよく堪忍

をいたし何所までもよくせんばうきて眞實又忠義を盡すべし一切の奉公人たる者の此吉兵衛のやうに心得てつとめたらば何やうの無理をいひ玉ふ主人たりとも仕へ安かるべし况や慈悲情けある主人よおいて猶更仕へ安かるべし何分にも此吉兵衛のやうに心得て勤むべし是を一切奉公人の手本とすべし辛抱堪忍の諸願成就の本也福徳の澤山に來る道あり此吉兵衛の忠義一途につとめた故に天の冥加に叶ひ大身体をもらひ彌々益々繁昌して出店の五十三軒もあるやうにありし家來の道を盡したる所の福分あり若又主人の仁不仁を見て忠義をする人の主人の仁にくらべてする忠義あれば先の主従の道にはづれて忠義といひがたし他人あしらいあり是等の人は福徳なし主従の道をし是によつて主人の仁不仁にかまわずと眞實に忠義を盡すべし末の大福長者とつて世の中を安心にくらすとうたがひなき一切の奉公人たる者此儀を篤とまつて厚く忠義を盡すべし

○武道初心集下に奉公をつとむる武士第一のこゝろへは主君たとへいかほど無理非道を仰せられいかやうの御志かりに預り候共恐れ入て御意を承り迷惑至極の体を致すべしたとへ主人より其方あやまりなきにおいて申し開きを仕れ候と仰せられ候と直々申譯あるの御言葉をかへすと申して主従の作法に違ひ大ひある無禮大罪あり然りとはいへども武士道のさうり共相成べきほどの義あらば夫の格別の子細あれば其時を過て家老用人

杯へ便りて申開きの御取成頼み入等の事のあくて叶わざる義あり是も付ても主君の心こをばもはぐよあらず其身の一分を相立候やうによろまき御請答へ申上べくい夫も付て古き武士の事を書えりし申候慶長年中福島左衛門大夫政則の家來に似又右衛門と申す大剛の士あり在陣の砌ぎり夜中又政則の陣中不慮の騒動あつて家中の諸士幾らず本陣へはせ集まることあり其翌朝に至り政則又右衛門に對して其方儀夜中さうさうの刻み鎗にさやをかけるがら持出たるのいかの事ぞと御尋ねありければ又右衛門承り御誼のおもむき御尤に候昨ばん方より以の外雨天又付あまざやをかけ置候を其儘持出候然ればさやをかけるがら持出しと御覽遊ばされたるの御尤に奉存候と申上ければ政則扱へ聞へたりと御申有てあい濟けり其後傍輩衆又右衛門に申けるの夜前其許儀の鎗のさやをはづして持出られしをいづれもよく見届け罷在し幸ひ證人もあれ今朝御尋の節雨さやをかけ置どの御請へ一圓心得がたしとたづねければ又右衛門聞てあまざやの儀の各々方も御存じの通り油紙一重の事にいへぬき身の鎗も同前也かりそめにも大將の御目がね違ひとあるの重き事あり爰を以て右の通り御請よ及びいと申ければ是を承る諸人又右衛門が心入のはどかんにじけるとあり自今以後とても主君の御側近く御奉公をつとむる武士の共心得あくて叶わざる事あり初心の武士心付の爲仍て件のごととあり此又右衛門がごとく

心得てつかふべき事本道也

○扱孟子齊の宣王は主従の道を説玉ふ事又楠の家訓豫讓等の事の主人の心得を申す事あり家來の道ははづれたれ共人情の又かくのごとき事もあれば一向に筋なき事と思ふべからず主人の仁惠薄ければ自然と忠義も薄くある事あり又仁惠薄き人の其外にもあしき事あつて忠義も思ふやうに盡しがたき事もあり是主人の使ひやうによつて忠にも不忠にもある事あれば主人の使ひやうも大事あり主人たる者の此道理をよくまづて家來を我子兄弟同前と思ふべし万事慈悲情けあつて道に當るやうに使ふべし

○又主人の恩惠使ひやうに上中下種々無量あり家來の忠義にも上中下種々無量あり一がいにいひがたし此の主人の不實にまて未頼母しからずと思ひ主人の仁惠にくらべて奉公する事もあり又主人もかれの不實者にして大事の用も頼みがたし折もあらばひまを遣わすべしと思ひて使ひ居るもあれば千差萬別あり一がいと思ふべからず孔子已に見行可の仕へあり際可の仕へあり公養の仕へありと孟子に見へたり見行可の仕へといふの道の行あわるべき兆しある故に仕へ玉ふ事あり又際可の仕へといふの主君交るに禮を以て敬ひ玉ふ故に先留まりて仕へ玉ふ又公養の仕へといふの主君より賢者を養ふたまものある故に仕へて居玉ふ然れども道の行あわれざる時へ去り玉ふ孔子も事により時に臨んでい

かくの如きの仕へありいわんや其餘の者共のいろく様々の仕へやうある筈としるべし又抱關擊柝の仕へあり是の道路の關門を守り柝木を打てまゐる役也是の忠義を盡し道をおこさわんが爲にあらす貧乏故に妻子を養ふわんが爲に奉公する也主人にも色々あり家來にも色々あり事により時に臨んで人を使ひやうあり人に使われやうあり勘へ置べし然れ共家來の者の佃氏吉兵衛のやうに心得て主人に仕へ奉るべし主従の事の四書五經等の堅き教へばかりよての委敷事のしれ難し主従の心得千差万別あれば教へも又千差万別あり色々様々の譯ありて一朝一夕の論にあらす是に依て古今諸賢人の名言を以て勘へさればほどよい所のしれがたし先この本の始終をよく見て人を使ひやう人につかわれ様のあらましをしるべし人として人を使ひやう人に使われやうをしらすんべ家も國も治りがたし上下共に大入用よく心得ふべきの第一也いづれにしても巻中の事をよく心得て中道のはどよい所を通り玉ふべし人により時に隨ひて大入用の事あり見て考へ玉ふべし
此外主君方の生身の神明ある事又御供先の喧嘩口論等これある時の心得又道中船場川越御旅館の前後出火等有之時の心得又主君をいさむるに大事の秘事口傳ありいづれの家にもよくある事あれば臣下たる者のよくしらすんべあるべからず此事ハ六編にしるす見て考へ玉ふべし

主從心得草五編下終

明治廿六年三月十一日印刷
同年全月十一日出版

印刷發行兼
刷者

東京日本橋區大傳馬町二丁目十四番地

大草常章

東京京橋區築地一丁目六番地

太賣捌 田中太吉

東京日本橋區大傳馬町二丁目十四番地

賣捌所 松榮堂書店

東京日本橋區新和泉町一番地

印刷所 今古堂

特約

賣捌

信州 羽前 越後 同 同 同 同

長野 吉野 山形 三條 長岡 同所 水原 地藏堂

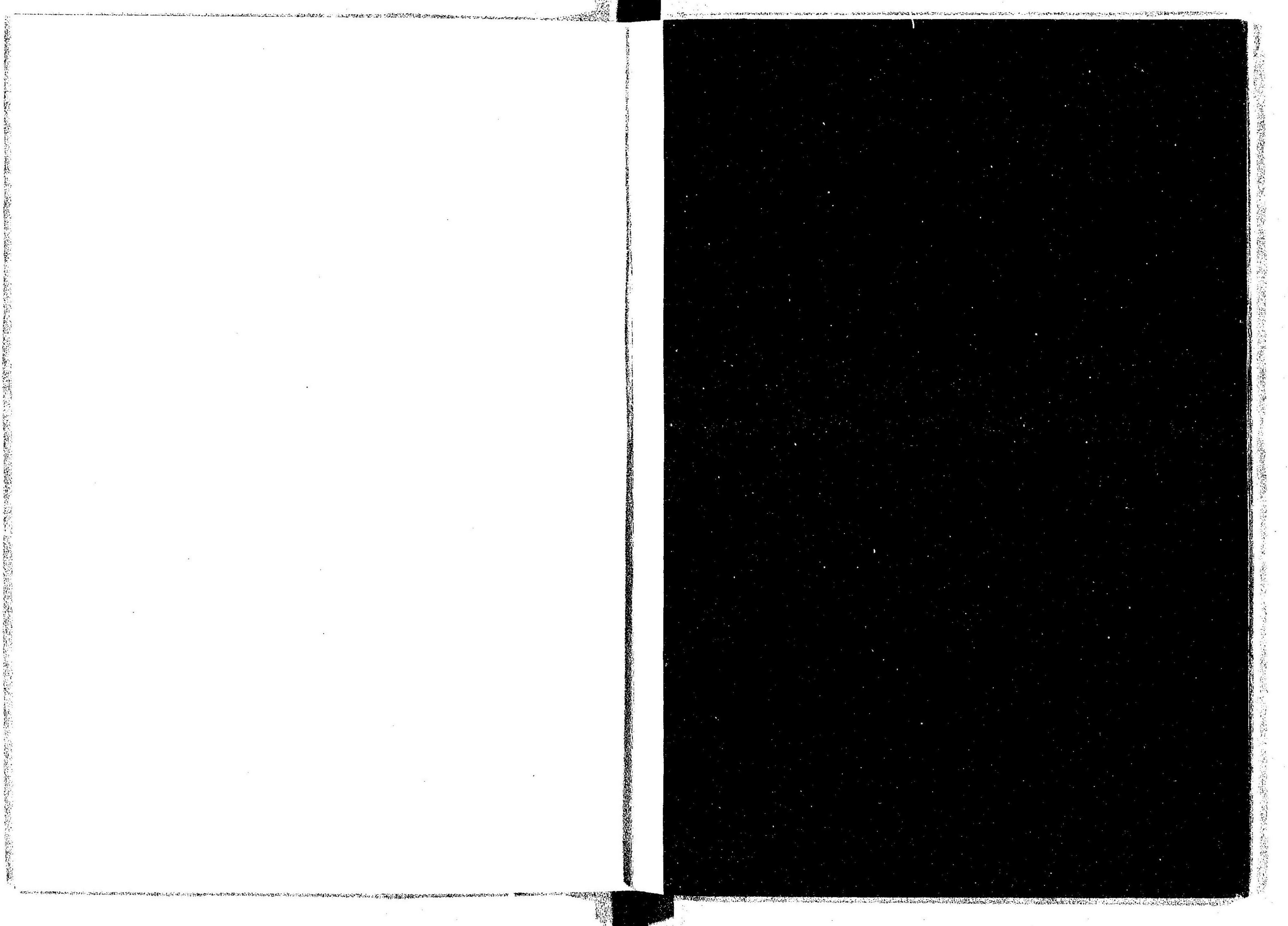
西澤 長五 樋口 松原 江西

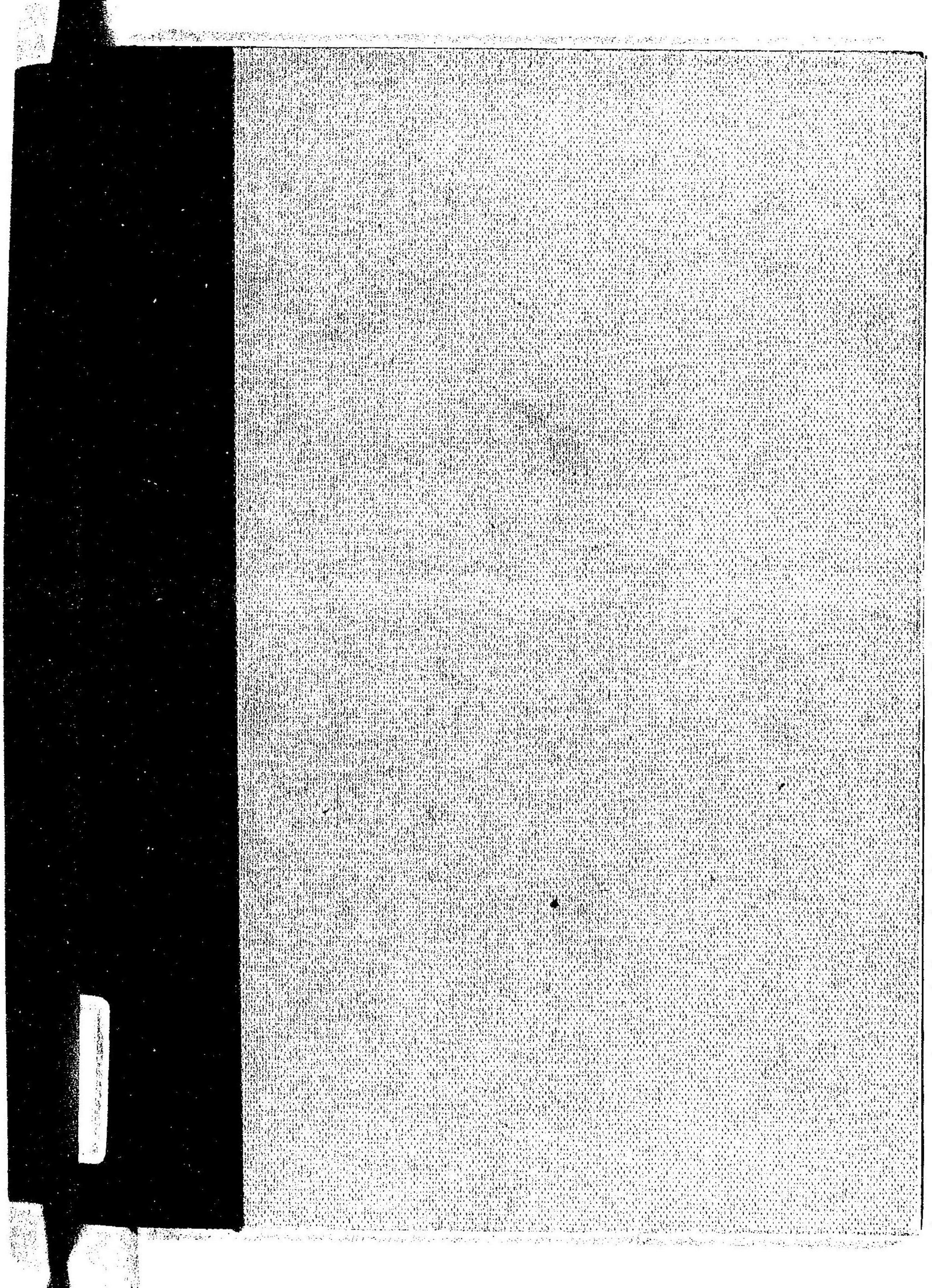
喜忠 田澤 十嵐 張口 村田 口

喜忠 太 小 治

太 之 右 左 兵衛 藤六

助郎 門 門 衛 平 平 吉





主徒心得草 下

国立国会図書館

特21

923

特

92